

5月27日(木)
18:00~20:00

テーマ

多様化する家族

～家族の形成過程を中心に～

法学部教授 鈴木 伸智

10月2日(土)
10:00~12:00

「家族」にかかわる法律の中心となるのは民法典(とくに第4編親族・第5編相続)ですが、現行の民法典には「家族」という用語は登場しません。「家族」の法律上の定義は存在しないのです。そこで、国語辞典を紐解くと、「家族」とは「夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」(広辞苑第7版)と書かれています。それに従えば、「家族」の中核は夫婦・親子であり、それらを形成するのが主として婚姻(配偶関係の形成)・出産(親子関係・血縁関係の形成)ということになります。そして、社会的にも「男女が婚姻をして子どもを出産する」というのが、家族形成の「標準」と捉えられてきました。ところが、わが国でも内縁(事実婚)が一定の保護を受け、諸外国では同性婚が認容され、また、生殖補助医療によって生まれる子の数も増加しています。形成「過程」が多様化しているのです。はたして、前記の家族形成の「標準」は、現代社会においても「標準」たり得るのでしょうか?この講座では、家族の形成「過程」に関連する法的な問題について解説したいと思います。



講師紹介：すすき しんち

専攻：民法(家族法)

略歴：青山学院大学大学院法学研究科博士後期課程標準修業年限満了退学。青山学院大学法学部助手、愛知学院大学法学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。

主な著書・論文：『家族法〔第2版〕』(共著、法律文化社、2019年)、『Qからはじめる法学入門』(共著、みらい、2017年)、『同性カップルと家族形成 アメリカ合衆国』(比較法研究79号、2018年) など

6月3日(木)
18:00~20:00

テーマ

アカウンタビリティを履行すること

～多様な責任を果たすには～

商学部准教授 中澤 優介

10月9日(土)
10:00~12:00

「アカウンタビリティ」には馴染みがなくても、「説明責任」という言葉を聞いたことがある人は多いのではないのでしょうか。「アカウンタビリティ(accountability)」は現在では一般に「説明責任」と訳されていますが、ビジネスの領域では多くの場合、「会計責任」という訳語を以て理解されてきました。これはビジネスに関する範囲では会計が最も有効な「説明責任」の履行手段であるということおよび、企業が果たすべき責任がどのようなものとして認識されてきたかを示しているといえるでしょう。

しかし、アカウンタビリティの履行とは本来的に責任の履行の一形態であり、CSR(企業の社会的責任)概念の普及にともなって、企業が果たすべき責任も環境や社会に関するものにまで拡張されてきました。これに伴い、アカウンタビリティの履行範囲も拡張されてきていますが、アカウンタビリティの履行を拡張することで多様な責任を果たすことができるのでしょうか?

この講座では、哲学的な「責任論」に依拠した会計学領域でのアカウンタビリティ研究をもとに、企業がそして私たちが多様な責任を果たすために多様なアカウンタビリティを履行することについて考えていきます。



講師紹介：なかざわ ゆうすけ

専攻：社会環境会計、管理会計

略歴：2015年、神戸大学経営学研究科博士課程後期課程修了。博士(経営学)。2015年より愛知学院大学商学部講師、2018年より現職。

主な論文：『追求ではなく構築するものとしてのアカウンタビリティ—インテリジェント・アカウンタビリティに見る会計の役割—』(2012)『社会関連会計研究』第24号、69-82頁。／『アカウンタビリティが開かれるとき—関市国保藤沢病院の事例に見るアクターの複数性—』(2014)『国民経済雑誌』第210巻、第1号、101-119頁(共著)。

※春季名城公園キャンパス公開講座と秋季日進キャンパス公開講座は同じテーマ、内容となりますが、申込みは別となります。

6月10日(木)
18:00~20:00

テーマ

多文化社会における寛容と不寛容

～アメリカの日系人強制収容に学ぶ～

文学部(英語英米文化学科)教授 高木(北山) 真理子

10月16日(土)
10:00~12:00

日本社会が次第に多文化化・多民族化していることはすでに誰の目にも明らかでしょう。そして、日本も多様な言語文化背景をもつ人々が、平和に「共生」できる寛容な社会をめざすべきだという考え方も普及しています。しかし残念ながら、言葉や文化、外見の異なる人への目はまだまだ冷たいものがあるのも事実のようです。

また、「移民のつくった国」、「多文化社会」であるアメリカに目を向けると、多文化・多民族が自由と平等の理想のもとで共生するという理想が、いかに困難かに気づかされます。アメリカはかつてその歩みの中で、非白人に対する差別・排斥の政策をとりました。そしてアメリカは、日本からの移民に対しても差別的な政策をとったことがありました。この講座では、太平洋戦争中の日系人強制収容についてその背景を知り、強制収容をされた日系アメリカ人の声を聞き、彼らの経験から、今日「移民」や「異文化」に寛容な社会を実現するために、人々が学ぶべきことは何かを探ります。



講師紹介：たかぎ(きたやま) まりこ

専攻：アジア系アメリカ人研究

略歴：東京外国語大学地域研究科修士課程修了。ハワイ大学大学院社会学部博士課程修了。Ph.D. in Sociology. 2007年より愛知学院大学文学部教授。

主な著書・論文：『エメリー・アンドリュース(Emery Andrews) 牧師の活動を通してみるシアトルの日系コミュニティ—1940年代を中心に—』吉田亮編著『変容する「二世」の越境性—1940年代日米布伯の日系人と教育—』(現代史料出版、2020年)所収、『「間」を生きた「日系」歌人—上江洲芳子の沖繩、ハワイ、カリフォルニア—』細川周平編著『日本文化を編み直す：歴史・文芸・接触』(ミネルヴァ書房、2017年)所収、『芙蓉会(Fuyo Kai) —ワシントン大学における日系女子学生会と日米戦争—』(愛知学院大学文学部紀要42号 2013年)等。

6月17日(木)
18:00~20:00

テーマ

多様な社会における達成感・喪失感・

孤独感からの旅立ち

～心理学・医学・生物学・物理学的視点からの考察～

愛知学院大学名誉教授 千野 直仁

10月23日(土)
10:00~12:00

最初に、現代社会の多様性とその広がりを一瞥します。例えば、伝統的な性、年齢、職業などの階層に対して、最近ではLGBT、100歳以上の老人の増加、非正規就業者の増加などが注目を集めています。つぎに多様性を「現代社会」に限定せず人の心理学的・医学的・生物学的・物理学的レベルでの多様性について議論することにより、その意味と意義を考えてみます。例えば、古くからエントロピーという概念が知られており、エントロピーの増大は物事の選択肢が増えることを意味します。一方では、熱力学の分野では閉鎖系のエントロピーは増大することがわかっており、閉じた系では混沌さが増大する、すなわち物事の秩序が失われることを意味します。講演では、このようなエントロピーの概念を多様性と対比させ、心理学、医学、生物学、物理学などの知見を踏まえて、現代社会の多様性の意味と意義を考えます。最後に、それらを踏まえた多様な社会における壮年期・老年期の個々人の達成感・喪失感・疎外感・孤独感などからの旅立ちについて考えます。



講師紹介：ちの なおひと

専攻：計量心理学、数理心理学

略歴：1972年、名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士課程修了、博士(教育心理学)。2020年より現職

主な論文：(1). Chino, N. (1993) Geometrical structure of some non-distance models for asymmetric MDS. Behaviormetrika, 20, 35-47. (2). Saburi, S. & Chino, N. (2008). A maximum likelihood method for an asymmetric MDS model. Computational Statistics and Data Analysis, 52, 4673-4684. (3). Chino, N. (2012). A brief survey of asymmetric MDS and some open problems. Behaviormetrika, 39, 127-165.

※春季名城公園キャンパス公開講座と秋季日進キャンパス公開講座は同じテーマ、内容となりますが、申込みは別となります。